ニッポン ドクター和の 臨終図巻

㉝③ 作家 伊集院静

元気な姿でさよなら

「ゴルフには、その人となりが出る。品性、品格と言ってもよい」

僕は大のゴルフ好き。だからこの人が以前、日経新聞「NIKKEI The STYLE」に連載されていた世界のゴルフコースにまつわるエッセーを楽しみにしていました。そこに書かれていたのが、冒頭の言葉です。ゴルフのこと、酒のこと、旅のこと、女性のこと……品性と美学が醸し出される文章。行間から漂うダンディズム。自分もこんなふうに生きられたなら…男たちの憧れを受け止めながらそう感じさせないところもまた、粋でした。

作家の伊集院静さんが11月24日、死去されました。享年73。死因は肝内胆管がんとの発表です。伊集院さんがこのがんを診断されたのは、10月初旬のこと。治療のため執筆活動の休止を発表されたのが10月27日。それから1カ月もたたないうちに旅立ちました。

肝内胆管がんは、文字通り肝臓の中を通る胆管にできるがんのこと。自覚症状がほとんどなく進行していくため、見つかったときには、完治を目指すことが難しいケースが多くあります。患者数も少ないため、その原因など解明されていないこともいまだ多くあります。肝内結石や胆石がこのがんのリスクを高めるという指摘もあります。進行をすると、肌や白目が黄色くなる黄疸（おうだん）や倦怠（けんたい）感、全身のかゆみなどの症状が出てきます。

妻の篠ひろ子さんは、以下のコメントを出されました。

「自由気ままに生きた人生でした。人が好きで、きっと皆様に会いたかったはずですが、強がりを言って誰にも会わずに逝ってしまった主人のわがままをどうかお許しください。最期まで自分の生き方を貫き通した人生でした」

察するに、執筆活動休止を宣言された後は、仕事関係者とは会わないと決めていたのではないでしょうか。がんの終末期になると、主治医などは「今のうちに、会いたい人に会って」と、今生の別れのタイミングを本人や家族に知らせます。だけど最期に「会わない自由」も本人にはあります。その気持ちは同年代男性の僕には痛いほどわかる。元気な姿のまま相手の記憶に留まっておきたいという願いもあるし、何よりも、目の前で涙を堪えられたりしたらたまらない。これが男のエゴなのかダンディズムなのかは、人によって分かれるところでしょうが…。

伊集院さんは、著書『さよならの力　大人の流儀7』（講談社）にこう書いていました。

「人の出逢いは、逢えば必ず別離を迎える。それが私たちの〝生〟である。生きていることがどんなに素晴らしいことかを、さよならが教えてくれることがある」

長尾和宏（ながお・かずひろ）　医学博士。公益財団法人日本尊厳死協会副理事長としてリビング・ウイルの啓発を行う。映画『痛くない死に方』『けったいな町医者』をはじめ出版や配信などさまざまなメディアで長年の町医者経験を活かした医療情報を発信する傍ら、ときどき音楽ライブも。